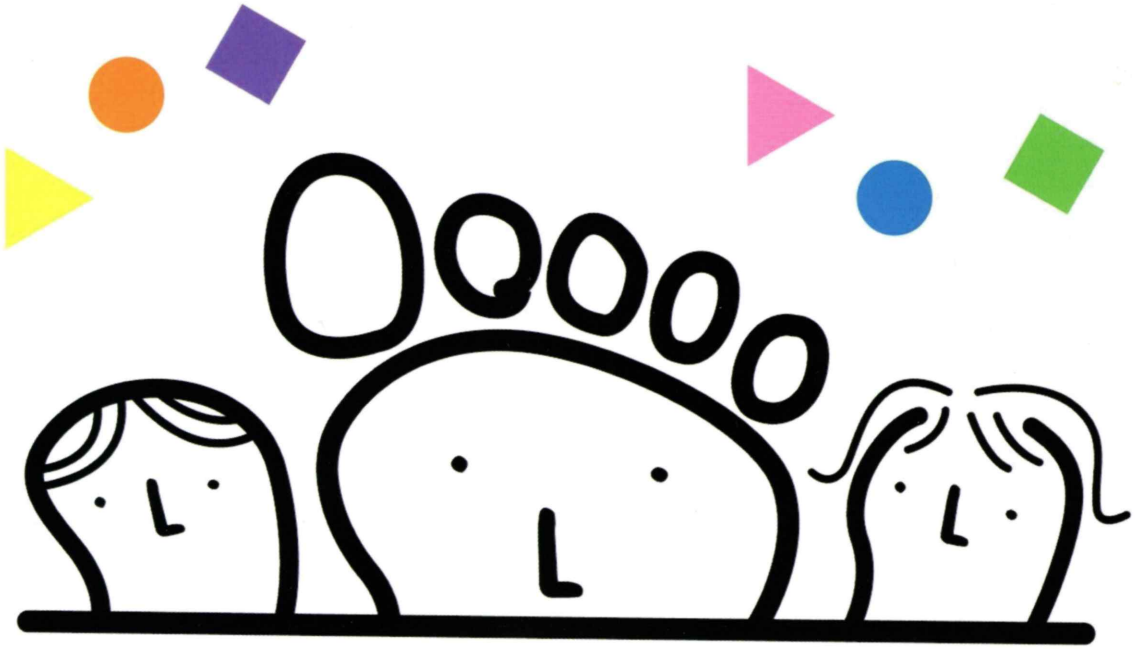
長野で暮すマイノリティを生きる僕らのために、
僕らが作るフリーペーパー

hanpo vol.09

TAKE FREE



家族のかたち

topic

- かぞく
- 私の二つの家族について
- 家族のカタチ
- こころのなかに、かぞく
- 変わらない集い
- 空想ハピネス図鑑

hanpoは、さまざまないきづらさを経験してナガノで暮らして
複雑な思いをしているあなたに、ナガノに住む半歩先にいる人たちの
声を伝える手紙です。

hanpo とは

いま、様々なマイノリティのもとに孤独を感じていたり
つらい思いをしている１０代から２０代くらいのあなたへ

ナガノで様々な生き方をして暮すマイノリティ※の経験者たちが
自分たちの経験を伝えるフリーペーパー＆ＳＮＳです。

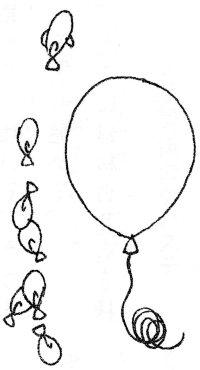
気軽な家族「かぞく」

わたしの家にはよく外国のお客さんが来ていた、
わたしの家族たちはそうした客人を「家族」として迎えた。
そうやってうちに来てくれる客人たちも、
みんな、我が家のように過ごしてくれたし、
「家族」と言ってくれた人たちがたくさんいた。
わたしはそれを不思議には思っていなかったし、
「家族」たちもそれが当たり前だった。

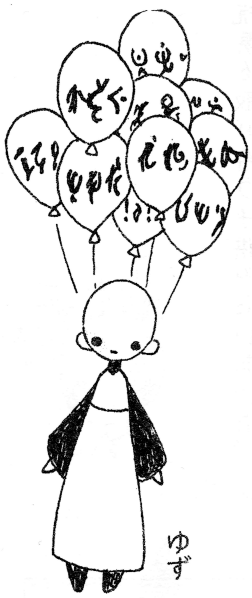
大人になってたくさんの人たちと出会う中で、
「家族」の言葉の重さは変わっていった。
家族という言葉が縛ること、その言葉で、苦しむこと、
その言葉が人を傷つけること、その言葉で救われること。
気軽に家族になれるなんて言えないし、
家族の代わりにはなれないことも知った。
それでも、わたしはあなたと家族のように接したいと思っていることを、認めなくとも、許してほしい。

hanpoでいう　マイノリティ　とは
不登校は学校の問題だけではなく、発達障碍、身体障碍、
内部障碍、ＬＧＢＴＱ、国籍、家庭の事情…etc
これらに当てはまらなくても、暮していて感じる様々な、
人に伝えにくく理解されにくい生きづらさのことを指す。

かぞく



「家族」というものを考えたとき、私は孤独を感じる。
私は、血縁の家族のことを考えたとき、
気持ちがソワソワする。
私は、愛している異性と結婚をして家族をつくる未来
に疎外感を持つ。
私は、私が「かぞく」と言いたい人を「友達です」と言う
ことがとても悔しく思う。
だから、「家族」というものを考えたとき、私は孤独を
感じる。
どこかで、「家族」を私には築けないものと思うと、涙か
こみ上げそうになる。
私にとって、血縁の家族は父親に勘当されてから、
一緒に過ごすことが出来ないものになってしまった。私
の特性を父親と折り合いをつけることが出来なかった。
受け入れ合うことが出来ず、家庭内で衝突し合うこと
を繰り返したため、母親が
「もう一緒に暮らさないほうがいい」と私を家から追い
出した。血縁の家族のことを「家族」と言わないといけ
ないとき凄く気持ちがソワソワする。
私にとって、身体は男性だけど、こころは男性でも女性
でもないため、全ての人が異性に感じる。そして、一人
の人とパートナーシップを築くことが良くわからない。
結婚という制度は本当に縁遠いものに感じる。社会か
ら疎外感を感じる。
私にとって、一人の人とパートナーシップを築けなくと
も、「かぞく」と呼びたい人が数人いる。お互い同意の
上で「かぞく」と呼ぶ。生涯一緒に居たい人。恋愛感情
はない「かぞく」、本当に「かぞく」である。けれど、様々
な公的な場や第三者に話すとき、「家族」とは違うの
で「友達」と訳す。悔しい。
既存の 当たり前 の中で「家族」を考えると、とても
窮屈になる。“
もしかしたら、縛られていたのは私自身で、視点を変
えれば、「かぞく」はもっと開放的になるのかもしれな
い。
私は、「かぞく」を「家族」と思いたい。
私は、どんなパートナーシップも胸を張って「かぞく」と
言いたい。
私は、たくさんの方々との関わりの中、お陰様で生きて
いきたい。
「かぞく」というものを考えたとき、私は幸せを感じる。



ゆず

ほんだなのオキグスリ

「かぞくのていぎ」

って何でしょうね、漠然と、生みの親だけが親じゃないし、
同じ家に住んでいれば家族かと言われたら、きっと首をかしげる。
自分自身の家族のカタチを替えるのは難しいけど、その形を探ることはできるはず。

私の二つの家族について

私の両親は数年前に離婚した。両親は昔から喧嘩ばかりしていたので、妥当なところに落ち着いたな、と思った。幼い頃、両親が喧嘩をしている間、私は二次被害を避けるため、部屋の隅っこで本を読んでいた。本の中の人たちは、優しくて、かっこよくて、私は読書に没頭するようになった。そんな感じで私は成長していって、中学生のとき、両親は大規模な喧嘩をした。家の中には険悪な雰囲気が漂い続け、私は耐えられなくなり、離婚してください、とお願いした。そこまでは良かったのだけど、二人共私の親権が欲しかったらしく、争い始めた。例えば、競うように食事を作り、私に二人分食べさせてくる。食べきれなくて、少しでも残そうとすると、睨みつけながら「体調でも悪いの?」と聞いてきて、それが怖くて気持ち悪くて、吐いて、そうすると勝ち誇ったように互いを罵り始めて、また私に食べさせてくる。そこには私の意志を挟む余地なんて無くて、彼らは玩具を取り合う子供みたいだった。私は彼らに愛されていた。でもそれは私が欲しい愛情じゃなかった。だから私は彼らを捨てた。彼らは私の家族ではない。同じ場所に住んでいて、私を養っている他人だ。そう思うと、途端に楽になった。とはいえ、私は寂しがりやなので、精神的な家族が欲しくなった。そこで私は作り物の中の人たちを家族にすることにした。新しい家族は優しくて、かっこよくて、寂しそうな人ばかりだ。私がなりたい人間たちだ。私もいつか、寂しがりやな誰かの精神的な家族に、いつの間にかなっていたら良いな、と思う。

しろ

ほんだなのオキグスリ　1

邦楽

The hole / King Gnu

ひとりぼっちで寂しい時も、どうしようもなく悲しい時も、ただ黙って隣に居てくれる。
休んでもいいし、泣いてもいい。弱い私を否定しないで弱いままの私を認めて、
赦してくれる。優しい、家族になってくれる音楽です。

家族のカタチ

昨年、祖母が亡くなった。
10年近い寝たきり生活の末の老衰。
亡くなる前はずっと付きっ切りで介護していた、両親を早く解放してあげてほしいとさえ思っていた。
そんな祖母が亡くなったとき、私は大泣きした。
祖母は厳しい人だったので、家にずっとひきこもっていた私のことをよく叱っていた。
私も祖母に対して、敵意をもって毎日喧嘩するのが日課になっていた。
二世帯住宅の家庭で、両親の家にいるのは、両親や兄に申し訳なくて居られなかったので、毎日祖母の家に逃げ込んでいた。
祖母はとても頭のいい人だったので、難しい言葉で兄や周りの子どもたちと私を比べて非難し。
私は屁理屈をこねて、祖母とは毎日お互いに互いのことを罵りあっていた。
私は、祖母のことを常々めんどくさいと思っていたけれど、祖母は一度も私のことを追い出したりはしなかった。

毎日酷いことを言われていたにもかかわらず…だ。
私が家を出るのと同時期に祖母は呆けてしまった。
引きこもっていた生活の幕を引いて、心の整理がついたら、いつかこのことを祖母に聞いてみたいと思っていたのに時間が過ぎていく中で、どんどんと会話はできなくなっていった。終ぞこの疑問を祖母に聞くことはできなかった。
祖母はまぎれもなく私の居場所だったのに、
私に残ったのは、暴言を放った罪悪感。

家族だから甘えてはなった言葉、
家族だから言ってはいけない言葉。
面倒を見てくれるだけが家族のカタチではなくて。
知らない間にいろいろなことから守っていてくれている、そんな存在だったりもしてくれている。
自分にはない視点を見せてくれた。
そのことに、今すぐに気が付いて、何かをする必要はない。いつか、そんなことを思い出すことがあれば、いいのかな、なんて、そんなぼんやりした言葉を、ここに残しておこうと思う。

しおあじ

ほんだなのオキグスリ　2

本

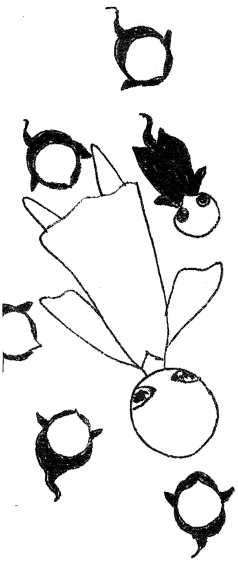
教養(インテリ)悪口／堀元見

日常的に、SNSやメディアと接することが多くなった昨今、不愉快な悪口を目にすることが多くなった。
この本曰く、そんな悪口が不快に感じるのは悪口に知性がないからだそうだ。
わたしも家族に日々心無い言葉をかけてきていたのだと反省している。だけれども、言いたくなるシチュエーションがなくなるわけではないので、言ってしまうのだけど。そんな時、悪口は悪口でも、知性のある悪口だったら、そんなに険悪にならずに、会話のタネになったりもするのだろうか。あるいはそこにいるのはより陰険な奴かも。

こころのなかに、かぞく

家族ってなんだろう。
社会的養護のもとで育ったわたしには、よくわからない。
だれかに「家族は？」と聞かれたら、
「…いない」と答える少女でした。
特殊な環境にはすぐ慣れたけれど、なんで私だけ？
さみしい、かなしい、という感情がなかったわけではないの。
困ったとき、いじめられたとき、分からない宿題があるときに一番に話をする存在がいないこと。
これは誰に相談したらいいのだろう、だれに言うのが適切だろう、そう考え続けて結局自分だけの秘め事になった。
母の日や父の日や敬老の日、二分の一成人式で感謝を伝える手紙を書けなくてトイレで泣いたこと。参観日は苦しくてたまらないから保健室に逃げてみんなが車で帰ったあとの静まった校舎に、自分の鼻をすする音が響いて余計に悲しくなった。
ともだちが羨ましいと何度思ったことだろう。
みんなにとって当たり前にあるかぞくという存在が、うんと遠くに感じた。

3年前、こんなことがあった。
結婚する話が出たときに一般的な家族、家庭で育ってこなかった自覚があるわたしにとってそれらを知らずに他人と家族になるということが、こわくてこわくて仕方なかった。
そう不安を打ち明けるとパートナーは
今結婚したら、多分人生で一番長く一緒にいるのは、血も繋がっていない他人の俺なわけで。
俺だって、毎日親と一緒に過ごしたのはたったの18年だけで、たぶん人生の中では他人と過ごす時間のほうが多いと思うんだよね。
と言った。
わたしはその言葉を聞いていろいろと振り返ってみたら、産まれの家族よりも他人と過ごした時間のほうが長くて色濃い。私を形作ってきたのもそのひとたちなんだって、



マンガ

ほんだなのオキグスリ　3

ララララ／金田一蓮十郎

この人の話がほんとに好きで。。。たびたび紹介してますが、今回は結婚詐欺？から始まる家族のマンガです。
コミカルなタッチで送られているはずなのに、恋愛観、結婚観、ネグレクトや躾、トランスジェンダーの話なども出てきて、家族だけでなくて社会の問題って日常と隣り合わせにあるのか、などと考えさせられる物語です。
全十巻なので割と読みごたえもあるけどさっくり読める長さでおすすめです。
金田一さんの漫画はいつも家族がテーマあるんですが、何が彼女にそこまでさせるのかが気になります。

知らないうちに
こころのなかにそっと、家族のようなひとをおいていたんだなってふと気づいたんです。

この人にならなんでも言えるし、たぶん私のこと嫌いにならないだろうっていう謎の自信が湧いてくるような、おせっかいな大人、病んだときによく行く路地裏にいつもいた猫であったり、3人にも満たない気のおけない友人であったり。
母はこの人で、父はこの人、この人は姉で…と。
勝手に決めちゃってる。本人に言うことはない。
勝手にわたしがおもっているだけなんたけどね。

退学したときも、ホームレスだったときも、
2年におよぶ入院生活、死にたいと思っていた日々も、
バイト先で自分だけ全然仕事ができなくて辞めたいと思ったときも、働いていた会社が潰れて突然無職になったときも、〇〇歳なのにみんなより全然なにもできないと悩んで死にたくなるときもどんなときも、つらいときに頭に思い浮かぶのは、他人がかけてくれた言葉。誰かが助けてくれたときの情景。スクショして撮ってあるメッセージ。ボロボロになっても取ってある手紙。

たくさんのこころのなかの家族がわたしの後ろ盾になり、なんとか進んでこれたとおもっているんだ。
こじつけかもしれないけどね。

＊

血の繋がった家族が心配したり気にかけてくれるのは当たり前と感じている人は多そうな気がするけれど
他人はどうだろう。
そもそも期待できないからか、"私なんか"に他人が気にかけてくれるのって、奇跡みたいな、アンビリーバボーなことなんじゃないかなと思う。だからうんと嬉しく思う。顕微鏡でしか見えないようなちいさな奇跡かもしれないんだけど、それが強い支えになってくれた。

わたしも、いつか誰かのこころの家族にしてもらえたらな
そんな、おせっかいな大人でいたいとおもうよ
きっと、10代の頃のわたしにはウザがられるだろうけど（笑）

落花生

ほんだなのオキグスリ　4

音楽

朝ごはんの歌/手嶌葵

ごはんをつくる時、かぞくのことを想いながら作ると少し暖かくなる。
同じように、
この曲を聴くと暖かい気持ちになる。さつまいもと玉ねぎの暖かいお味噌汁を食べたくなる。
ホカホカする。

変わらない集い

生きていれば生きているほど、世の中にはいろいろな〝集い〟があることを知る。学校に職場、趣味のサークル、飲み仲間。町内会やら保護者会、自助グループだとかデモ隊だとか。共通の目的や課題を見つけては、事あるごとに僕らは集う。それらは当人らの意思や選択で形成されたり参加するわけだが、動機は前向きなものばかりではない。誰かに指示されて、だったり、生活を維持するため、だったり。でも、本人のそんな事情なんて介入する隙もなく、ただただ輪のなかに産み落とされる。子における家族とは、そんなものではないだろうか。

断っておくと、そんなに悪い家庭で育ったわけではない、と思う。色々あったけど特に不自由なく過ごしてきたし、まあ、父親が多少だらしなかったくらいだ。にも関わらず、家族という集いを窮屈に感じていた。成長や変化とともに輪の外へ駆け出そうとすれば、血縁という紐が足を引っ張る。「変わっちゃいけないのか」そんなふうに思わせられる。思春期特有の心情の移り変わりと風通しの悪い集合体は、どうも相性が悪い。

大人になったいまだから言語化できるけど、当時はこんなことを思っていたのだろう。

先日、28歳になった。今年も母親から律儀にケーキが届く。毎年のように届く。変わらない。変わらないことが、ありがたいと思うようになった。誕生日の少し前、バレンタインデーにもチョコが届いた。これも毎年のことだが、こちらは少し変化があった。僕のぶんと、子供のぶん。ふたつ届いた。大きなチョコレートの塊から、恐竜を発掘するようなやつが。

気付いたら、自分も家族を作っていた。うーん、とある家族の輪に入った、のほうが近いのだろうか。3年半くらい前にお付き合いを始めた人がシングルマザーで、当時2歳の男の子と暮らしていた。子供がすごく好きなタイプではなかったし、父親ではない男をどう認識するのか不安だったけど、すぐに迎え入れてくれたのを感じた。子育ての苦労を間近で見たり、おんなじ布団で寝たりしているうちに、一緒に暮らしたほうがいいんじゃないか、と思うようになった。半年後には、生活をともにするために引っ越し。そのまた2年後には（妻が）家を買って引っ越し。この数年で社会も色々変わったけど、負けず劣らず我が家も変わった。気付けば子供も5歳である。

ほんだなのオキグスリ　5

Mather1 Mather2 /NintendoSwitch(ゲーム)

プレイやーは超能力を操る少年となり、友達と冒険する、精一杯の体力と知識で！

そんな中マザー2のとあるシーンの中で、自分が生まれてきて、

両新が喜んでくてた事が、描かれて自分が世界に肯定されていることが描かれている。

私は思いもよらず、感情の死角を突かれたみたいになり、涙がでた。

そんなことを感じさせてくれたゲームでした。

夫婦別姓の事実婚、父と息子は血縁関係のないステップファミリー。中古の薪ストーブ付きスウェーデンハウスを購入して、親子3人で山暮らし。夫婦はともにフリーランスで、子供は自然のなかで学ぶ山保育に。なにこれ移住希望者向け冊子のインタビュー記事？

ずっと自信の持てない人生を歩んできて、その背景には多少なり家族が影響していると感じるからこそ、子供を育てる人生を経験するなんて想像していなかったはずが、想像のさらに果てにあったような暮らしをしている。なぜこんなにも生活が変わっていったかと言えば、異なる境遇や性格の3人が「ともに健やかに暮らすには」を最適化していった結果な気がする。自分が子供として家族に所属していたときには気づかなかったけれど、変わり続ける社会のなかで変わらない暮らしを描くために、”家族のかたち”はこんなにも慌ただしく変わっていたのだ。

「きっとわかってもらえない」。変わろうとするたび、家族にどう思われるか大きな不安を覚えてきた。学校に行けなくなったときも、進路で悩んでたときも。そして、いまの家庭を築くときも。案の定、最初は全く理解してくれなかった。半年かそこら付き合った歳上の子持ちの相手と一緒に暮らす？まあ、そりゃあ、心配になるよなあ。（結果はどうであれ）子供が平穏に過ごせるようにと築いてきた”家族のかたち”から、我が子が大きく逸脱しようとしている。大いに反対されて、僕はそれを無視して、一緒に暮らしはじめた。それから暫くのあいだ、親に妻や子供の話はほとんどしなかった。できなかった。

一年半くらい経った頃に、転機があった。久しぶりに実家に帰ったとき、母親が「あなたの子供はなにが好きなの？」と聞いてきた。恐竜が好きだよ、と答えたら、ティラノサウルスの形をしたリュックを子供にプレゼントしてくれた。母親なりに、理解しようと努めてくれているのを感じた。次に帰ったとき、ようやく妻や子供の話をちゃんとした。そのまた半年後、ついに僕の家族と僕の家族が対面した。用意してくれていた恐竜のカルタを、両親と兄、妻と子供がテーブルを囲んでやっているとき、ああ、こんな日が来るんだなあ、と思った。性質として変わりづらい”家族のかたち”を変えようと、色々考えてきてくれたんだなあ、と。

…家族をテーマに書いてほしい、とお願いされて、この数年のうちに起こったことを書きなぐった。まとまりがなくて申し訳ないけれど、まだ親になって日の浅い自分が、いま残しておきたい言葉を最後に綴って締めたいと思う。

子にとって”家族のかたち”というものは、自分本位に変わってくれない、やりづらい集いかもしれない。けれど、なぜ変わりづらいかと言えば、本来は子をはじめとする家族のためなのだと思う。ただ、荒れ狂う社会から子を守るために、本質を見失って、子の変化さえも受け止められないこともあるのだろう。でもね、一番の願いは「子に健やかに生きてほしい」であって、健やかの定義なんて、そのときどきの君次第だ。だから、親なんて気にせず、変わっていけばいい。親になった自分から、当時の自分へそう伝えたい。

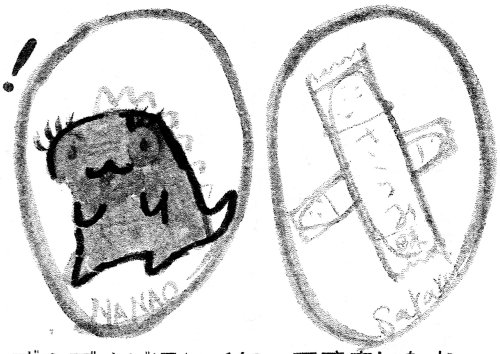
ハタコシ

今回は無理を言って書き下ろしでおどりばからハタコシさんに書いてもらいました。↓

おどりばについてはこちら↓

https://odori-ba.net

編集後記!!!



これが出るころは、年度末。
この時期はただただあわただしくて嫌いです。
どうも、しおあじです。

この半年くらい、「家族」ということについて考える機会がたくさんありました。わたしの家族観はやっぱり、「いい家族」にあって、家族とは「よくあるべき」と思っている節があります。でもそれだけじゃないんですよね、一緒に過ごすことが困難なことや、家族を思っているからこそ離れたほうが良いことだってあったり。
寂しさを埋めるだけなら、友人や恋人のほうが良いことだってあるよなぁ、って思ったり。
家族は、相手あっての家族だから、独りでは作れない。結局わかんないなぁ、家族。
わたしは、どんな家族をつくるのかな。。。

しおあじ

少しずつですが温かくなってきましたね。平地では雪も日陰にしか見られなくなりました。そういえば地面にアリを今季初観測しました。彼らも冬をどうにか乗り越えてきたのだなと思いました。陽気が朗らかになれば万事解決するわけでもないのですが、少しずついろんなことに雪解けが訪れてほしいと思う今日この〓です。また、先日ティラミスの作り方を覚えたので材料があればどこでもティラミスを生み出せる生命体になりました。以上、〓細なスキルアップのお知らせでした。皆さまよき春をお過ごし下さいませ。

ぱぐ

はじめて hanpo に文章を描いたの。今回のテーマは私にとって大きくて、とても大切なことを書きたかったから向き合った。でも、それぞれのカタチ、向き合い方があるからみんな違ってみんな良い。素晴らしい！！

ゆず、「月刊ゆずま」を発行し始めました～
わ～わ～わ～♪
下の QR コードから飛べるのでのぞいてもらえたら感無量です！！

ゆず

今回はほとんど編集に関われなかった。それでもこうやって編集後記を書いてくれと頼まれるのは嬉しい。今回のテーマに引き付ければ、家族の中でも、必ずしも役割が求められないけれど、仲間であるというゆるい繋がりが大事だなと思う。ありがとう。そして、編集仲間たちには、この文章における無理なテーマへの引きつけを許してくれる寛容な繋がりを求めたい。みんなお疲れ様！

なおと

ねぇ？水族館で一緒の水槽にいるさかなたちは家族なのかな？

どうかな？一緒にいても、家族ではないかもね。

スイミーはみんなのこと、家族だと思っていたのかな。
ジンベイザメはコバンザメのことどう思っているのかな？

そうだね、お互い、生きるために必死だからね。
都合のいい関係だったりしてね。

ねぇ、じゃあ、あなたとわたしは家族？

そうだね。

なんで言い切れるの？

だって、わたしがあなたと家族で居たいって思っているから。

Created By yuuki

「hanpo」のその他の情報や記事の続き、詳しいイベント情報は
⇒のＱＲコードの先
「hanpo」note 版に記載されています。挿絵イラストとか
記事を書いてくれる方を募集中興味のある方は連絡ください。
また、ご意見ご感想あと寄付とかカンパとかお待ちしてます。

―ご寄付のお願い―

これからもより多く、半歩先の声を届けるために寄付をお願いします。

＜寄付振込先＞ゆうちょ銀行　　<振込先口座名>　hanpo　ハンポ

＜店名＞　059 店　＜当座＞　＜口座記号番号＞　00510－5－0053632

-お問い合わせ連絡先-

hanpo 編集部　⇒⇒⇒　Email　hanpoedit@gmail.com

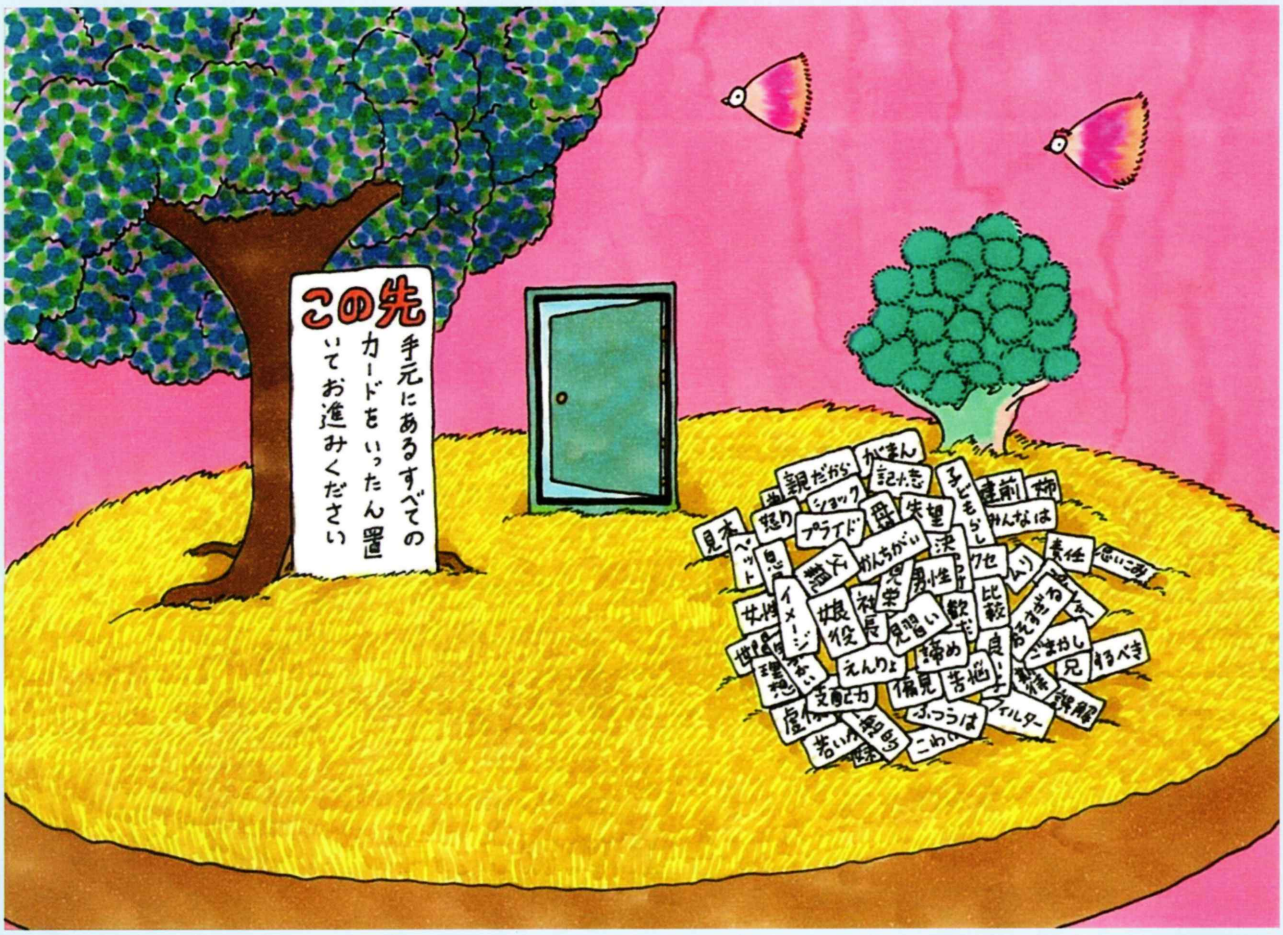
◇Twitter　@hanposakino　　◇Facebook　hanpo　　◇note　hanpo

妄想エゴハピネス図鑑

“肩書き”をはずして出会おう編

ズカン

「あったらいいな」で君をハッピーにし隊！隊長 アオヤギマユミ



hanpo

ナガノで暮すマイノリティを生きる僕らのために、僕らが作るフリーペーパー

◇発行　hanpo 編集部　　◇後援　長野県

共催◇上田映劇◇みんなのお家すまいる◇ブルースカイ◇長野県チャイルドライン推進協議会